

2023 年度 個人研究実績・成果報告書

2024 年 4 月 22 日

所属	サービス創造学部	職名	教授	氏 名	石井 泰幸
研究課題	Society5.0 社会における経営学				
研究キーワード	Society5.0、情報化社会、コミュニケーション、AI	当年度計画に対する達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた		
関連するSDGs項目	8. 働きがいも経済成長も	9. 産業と技術革新の基盤をつくろう	該当なし		該当なし

1. 研究成果の概要

経営学がもつ意義は経済社会において特に市場が躍動すべく個々の企業がいかにあるべきかを論及するものである。しかしながら現在の経営学は実証研究と学説研究とに分かれいわば実証研究がその確固たる地位を占め学説研究は傍流に位置するという感もある。しかしながら学説研究は実証研究を補完すべきものではなく学説研究のもと実証研究が展開すべきものである。この世界的実証研究の先行はどのように解釈すべきであろうか。

私の研究はこのような状況下の中で昨年さらに一定の成果を収めることができた。それは私自身が共同研究者とともに進めているアダム・スミス研究である。実際経営学の泰斗は科学的管理法の創始者であるテイラーである。テイラーは経済人仮説に基づいており、経済学を補完すべく経営学を論及した。つまり経営学説は経済学説から発芽したものであって経済学の上位概念に立つことはない。このように考えると経営学は経済学が個人を捨象するものであるのに対し、個人を際立たせ個人の動きを躍動していくものといえよう。

以上の点を鑑み、経営学と Society5.0 の在り方を 2023 年には一定の先鞭をつけることができたといえる。経営学は目的合理性による学問であって、目的を達成する一定の成果を希求するものである。従ってその成果を生み出すために組織を織りなすメンバーを躍動させ、そして集約させていく必要がある。それが管理として結実しその管理が支配構造へと転換しないよう組織的管理論といった協働を実現するものである。

協働とは組織であり、組織は二人以上の意識的に調整された諸力の集まりでなければならない。それは組織目的を達成するため個人目的が組織目的へと変奏されていくことが求められる。しかしながら個人目的が組織目的に傾斜していくにはリーダーによるコミュニケーションが不可欠であり、だからこそ経営学には管理論はもちろんであるが組織論が前提となるのである。しかしながら組織論は組織的管理論として管理能力が前提となるためその管理能力はリーダーシップとして表出することになる。しかしこのリーダーシップはテイラーによる経済人仮説によっては支配構造を強化するものとして組織を生き生きと躍動することにはつながらない。

このように考えると組織を躍動させるためにはバーナードの全人仮説に軸足を転換していかなければならない。つまり管理という概念を支配構造から協働体系へと変奏させていくことである。ところがこの協働体系は先に述べたようにリーダーシップが不可欠となる。そこで経営学にはリーダーシップの理論的解明が前提となるのだ。

昨今の成功している事例にはほとんどがカリスマ経営者であり、そのカリスマ経営者には普遍性は担保されない。つまり普遍性がないということは個人の特殊なパーソナリティに依拠するため経営学という学問がその存立の意味をなさなくなるのだ。そこで本研究においてはリーダーシップの可能性をより学問的展開に広がりを持たせここにアダム・スミスによる共感の思考がリーダーに必要となるのである。

ではアダム・スミスの共感も経済学にも発芽しているが実際アダム・スミスは道徳哲学者であり経済学は道徳哲学の結実である。従って経営学は経済学を補完するものとして理論的展開を図るとすればその上位概念としてアダム・スミスの道徳哲学はバーナードの組織論においても有効に機能するはずである。このように考え

ると経営学の理論的展開は経済学の理論的展開との連関を意味しだからこそそれが Society5.0 が国の政策へと舵を切ることができるのである。

改めて Society5.0 を考えてみると Society5.0 は Society1.0 からなる技術史と言い換えることができる。つまりその基本構造は技術が社会構造と関連し、人類史において技術がいかに社会に影響を及ぼしてきたかを発展段階的に俯瞰するものである。その技術史の時間と空間の隔たりは技術の高度化によって時間が凝縮され濃密化することになる。そしてそれは現代的視点でとらえると情報化に他ならない。そして情報化の意味も技術の高度化だけでなく我々の人間性まで刺激するものへと高度化していく。つまりそれは Society5.0 に置き換えると人間性の回復へと結びつくというのだ。

一方、2023 年の私の研究はアダム・スミスをいかに経営学に吸収し、Society5.0 の正体を見極めていこうとするものであるが、ギリシャ神話から技術を考えると技術はプロメテウスとエピメテウスがゼウスの後ろから盗み出し、人間に与えたものである。そこでゼウスはプロメテウスとエピメテウスに罰を与え、人間に慎みと戒めを課した。つまり技術を悪用せぬよう神はこの慎みと戒めを持って人間に技術の乱用をしないように申し渡したのだ。しかし技術は現在ロシア・ウクライナ、またイスラエル・ハマスといった対立の中で武器として多くの惨禍を生み出している。情報技術もウィルスに始まる様々なウィルスや SNS による誹謗中傷により多くの悲劇を生み出している。

このように考えるとギリシャ神話の警鐘が 2600 年の時を経ても現代につながっていることは我々は真剣に考えなければならないだろう。従って本研究における私の 2023 年の研究成果は経営学がいかにしてこの Society5.0 を人類の幸福に結びつくものとして結実すべく、多くの企業に新たな可能性を導かせる動力源としてさらに研究を深化させる可能性を導くものになったことである。

以上が 2023 年度の私の研究の概要であるが、以下に 2023 年度の成果を列記する。

・千葉商科大学哲学研究会主幹（個別の教員との哲学を技法とする本質的探究）

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

2024 年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【著書・論文（査読なし）】

2024 年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【学会発表等】

・「問とは何か」、日本産業経済学会第 88 回研究例会、2023 年 12 月 2 日、千葉商科大学

3. 主な経費

2023 年度の研究計画書に沿って適切に支出した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

・「組織経営からみえる世界」東京都立第三商業高等学校講演、2023 年 7 月 21 日

（本文は 2 ページ以内にまとめること）